# ２度目の誓い

minimum

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
２度目の誓い

【Ｎコード】
Ｎ９４８６Ｇ

【作者名】
ｍｉｎｉｍｕｍ

【あらすじ】
守っているつもりだった。でも本当は守られていたんだ…。コナンのほぼ独白で、ほんのりコ哀（？）です。初めて小説を執筆しました。読みにくい点もあるかと思いますが、広い心で読んで下さったら嬉しいです。

**（前書き）**

ほんのりコ哀です。苦手な方はｂａｃｋして下さい。…てかこれホントにコ哀というのかな…？

しんと静まり返った薄暗い廊下。
やや古ぼけた茶色の長椅子に座って視線を上げると、「手術中」の文字が赤くぼんやりと光っている。

ここに来て既に４時間が経った。
隣には博士がいたが、特に会話を交わすこともなく、じっと手術が終わるのを待っている。

ここは米花総合病院手術室前。
コナンは入口を見つめながら、数時間前の出来事を思い出していた――――。

＊＊＊

天気が良かった今日、俺は蘭と博士、そして灰原の４人だけという、いささか珍しい組み合わせでショッピングへ来ていた。

そこでいつものように事件に巻き込まれた。
いつものように博士を使って推理をし、時々灰原の助言やサポートを受けながら、当然の如く事件解決へ導いた。

そこで予想外のことが起きた。

逆上した犯人が警察の手をすり抜け、持っていた銃をこちらへ向けてきたのだ。
銃の先には、俺と蘭、灰原の3人。

一瞬だった。

俺は蘭を助けようと横に飛びつき、蘭を突き飛ばした。

二人とも地面に倒れ込み、すぐさま見上げた視線の先に、赤い赤い真っ赤な液体がその視界を遮った。

「哀ちゃんっっ！！」

すぐ隣で蘭の叫び声。

…なんだ…？何が起こったんだ…？

哀ちゃんっ！哀君っ！――――その他いろんな怒声が聞こえてくる。
犯人は警察に取り押さえられ、見知った刑事たちがこちらへ走ってくるのが見えた。

…ああ、そうだ。見たことがある。
あの寒い雪の日。
繋いでいた手はいつの間にか離れ、その為に灰原を危険な目に合わせる羽目になってしまった。
灰原の身体から流れていた真っ赤な血。背中にあいつの体温を感じながら、生きていることにすごく安堵して、そして怪我をさせてしまったことにひどく後悔した。

そうだ…。あの時と同じ真っ赤な血の色――――――。

「……っ！灰原っっ！！」

目の前の灰原は胸からドクドクと赤い血を流しながら、小さく早く、弱弱しく呼吸をしていた。すでに灰原の周りには人が集まっており、灰原に呼びかけたり、どこかに連絡を取ったりと慌ただしい。
灰原は、俺の声に気がついたのかゆっくりとその瞳を開け、痛いはずなのに、苦しいはずなのに、俺に小さく微笑んで見せた。

――――普段だって、そんな柔らかい微笑みなんか見せたことないのに。

「灰原！灰原！！」

守ると約束したのに。
もう傷つけないと、密かに胸に誓ったのに。

灰原の隣に駆けつけてその小さな手を握りしめ、俺は狂ったように灰原の名前を呼ぶことしかできなかった。

＊＊＊

「手術は無事成功しました。」

手術を終えた灰原は、すぐさまＩＣＵに運ばれた。
人工呼吸器や心電図モニター、輸液ポンプなどの医療機器に囲まれ、灰原の身体からは点滴やら胸腔ドレーンやら、たくさんの管が伸びていた。
白いベッドに横たわる灰原は、いつもより更に小さく、儚く見える。
痛々しいその姿は俺の胸に棘を刺したが、それでも生きていることに誰かに感謝したくなった。

「灰原、ごめんな。」

あの時。

博士から聞いた話によると、俺が蘭を庇って飛びついた時、灰原は迷わず俺達二人の前に飛び出したそうだ。
俺は蘭を助けることしか考えていなかった。
でもこいつは、俺達二人とも助けるために、自ら盾になったんだ。

守ってるつもりだった。

…でも本当は、俺が守られていたんだ。

灰原が倒れているのを見た時、俺の中の何かが急速に冷えていくのを感じた。
こいつを失うかもしれないって思った時、底知れない絶望を感じた。
蘭のことしか考えられなかった自分に、深い深い憤りを感じた。

———もう俺は、こいつを失うなんて考えられないんだ———…。

この気持ちを何というのか分からないけれど。

今度こそは、自分がこいつを守り通すと、眠っている灰原の顔を見つめながら固く誓った。

ばかね。
守られてばかりいるつもりはないわよ。
一緒に戦うって決めたもの。だから私にもあなたを守らせなさい。

照れくさそうに、それでも嬉しそうにそう告げる灰原と会えるのは、
数日後のこと。

**（後書き）**

哀ちゃんのことを、『思いっきり』コナンに自覚してもらいたくて書きました。自己満足のための小説のつもりでしたが、う～ん、消化不良…。いつの間にか博士と蘭が消えていますが、これは作者の力量不足です（T＿T）お読み頂きありがとうございました。

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9486g/

２度目の誓い

2010年10月9日04時42分発行